

『日本帝国の膨張・崩壊と満蒙開拓団』

細谷亨*著、有志舎、2019年

西崎純代†

満蒙開拓は、第二次世界大戦の日本敗戦にまつわる悲劇として強く記憶されている。テレビドラマなどで描かれる開拓民の引揚体験に共感し、実態を知っているように錯覚しがちであるが、本書『日本帝国の膨張・崩壊と満蒙開拓団』を読むと、知られていないことが実に多く、驚かされる。本書において、満蒙開拓の諸側面が次々と展開される様子は、評者にとって脱帽ものであり、著者の研究は高い評価に値すると考える。著者は満蒙開拓の研究を長く続けている研究者であり、本書の目的を、①満蒙開拓民の動員・送出過程を明らかにすること、②開拓民の満洲での農業経営と生活を、母村との関係や異民族支配の動向という視点を取り入れて明らかにすること、③引揚後の開拓民の生活を明らかにすること、と設定している。第一章から第四章までは、送出地域のケーススタディが取り上げられ、第五章と第六章では、満蒙開拓団と現地住民の関係を論じ、本書終盤では日本への引揚後の状況も網羅している。

本書の特徴の一つは、研究対象を分類し、仮説に基づいて送出地域の経済的特徴、家族や個人の行動などミクロレベルの分析を行う分析手法である。例えば第一章では、長野県下伊那郡の村々が取り上げられ、著者の分析は高い農業生産力を維持していた「模範村」、それに対する「貧弱村」に分類して行われる。その上で、川路村という模範村からの開拓団送出の過程を、昭和恐慌による長野県養蚕業への被害の影響はどうであったか、農林省の主導する農村経済更生運動の展開とはどのような関わりがあるのか、開拓団の参加の傾向は村内の社会階層と関係があるのか、等の視点で論じてゆく。著者は1932年から1935年の試験移民期には、中農層出身者の単独移民が主体、1937年から1941年にかけての本格的移民期では、貧農層も含む家族ぐるみの分村移民参加へと、移民の参加形態に変化が起ったことを指摘する。また、開拓団参加を呼び掛ける講演会への参加率を、開拓事業への関心度の指標として実際の送出比率と比較し、養蚕専業農家が多い地区が満蒙開拓に、より高い関心を寄せる傾向があったことなどを指摘する。ただし、満蒙開拓への送出率が高かった川路村においても、開拓民送出への関心は低調であったという。著者は、分村の話が出る村の会合は出席率が低調だったことなど、具体例を効果的に提示する。高知県では、開拓民が抽籤で選ばれるという事例もあったという。抽籤で選ばれても渡航を拒否した人々が多かったことなど、様々な抵抗の形があったことも、本書で初めて知ることができた。

* 立命館大学経済学部准教授

† 立教大学経済学部特任教授
nishi-r@rikkyo.ac.jp

本書は、開拓民と母村の関係、そして開拓地での生活状況にも目を配る。家族ぐるみの渡航の場合、世帯代表者が単身で渡航し、家族の満洲入植は、現地の生活基盤が整備された後と決められていた。残留家族の生活は、送出元が村費で支えることになっていたものの、実際には残留家族が経済的に困窮し、満洲に渡っていた開拓団員が家族の身の上を心配するあまり、規定に背いて強引に家族を呼び寄せる例があったという事情にも触れている。第四章で述べられている「北満」への入植では、入植地で食糧、物資、家屋が不足し、それにも関わらず国策として食糧増産が求められたことが述べられる。開拓地での生活の過酷さも、中国人農民など異民族への暴力や抑圧を倍加させた著者は考える。

第五章「『民族協和』の位相」では、民族協和というスローガンの下での、日本人開拓民と現地住民の関係にも触れている。差別的な発言が開拓民の間で聞かれたこと、さらには現地住民に対する威厳保持のために「ヒゲをたてるものが多くなってきた」という記述がある。日本人の「帝国意識」と言われるものが、具体的にどのような形をとったのかに関する興味深い事実である。また、著者は、関東憲兵隊文書も引き、移民用地として現地農民から相場の3～4割で土地を買収するなどしたため、現地住民の反感が強まり、暴力の応酬が敗戦後の開拓民攻撃への下地となった可能性を示唆している。一方、ほとんどの開拓団では現地住民の雇用労働なしでは農業経営が難しかった。現地住民から知識を学び、その働きぶりを見直す姿勢が見られたことも指摘する。

第七章では開拓民の引揚後の生活を取り上げ、生活保護法による救済、農地改革の影響、帰農などを詳しく論じている。開拓民を送り出した中央や地元の指導者の戦後にも触れ、開拓政策を擁護し続けた人々、沈黙を守った人々、自責の念にかられて命を絶った指導者もいるなど、送出に関わった人々の経験にも着目している。

満蒙開拓は、戦争の悲劇として記憶される。二度とあってはならないことというのは、多くの人に共通する意識であると思われる。しかし、後世では信じられないような出来事が、なぜ計画され、多くの人が積極的または消極的に関わったのかを、本書は読者に考えさせる。

最後に、本書の研究発表の可能性について添えたい。著者は記述統計を駆使して、どのような村や人々が満蒙開拓に参加したのか、あるいは参加に消極的だったのか等を明らかにしている。社会科学で流行中の計量分析が馴染むかどうかは不明であるが、統計分析を全面に出した論文を、欧米向けに発表してもよいかもしれない。壊滅的な国策への人々の反応を統計的に分析し、質的資料で肉付けするという試みは、海外の経済史研究者の間で関心を引くように思う。また、日本の一般読者の中には、史料が丁寧に引用されている本書を、ハードル高く感じる人もいるかもしれない。将来的には選書などに書き起こされてもよいと思う。いずれにしても、日本近代史、満洲開拓に関心を持つ人々に、本書が広く読まれることを願う。